

游美

- 1 松川 誠さんの作品と
作品についての言葉
- 2-3 美術鑑賞旅行
- 4 作家探訪 石村 雅幸先生
- 5 絵画講習会
会員のためのギャラリートーク
- 6 心に残る私の一点
あとがき



松川 誠 《仁王像》

2024年
油彩・カンヴァス／F80
2024年度茨城県芸術祭美術
展覧会

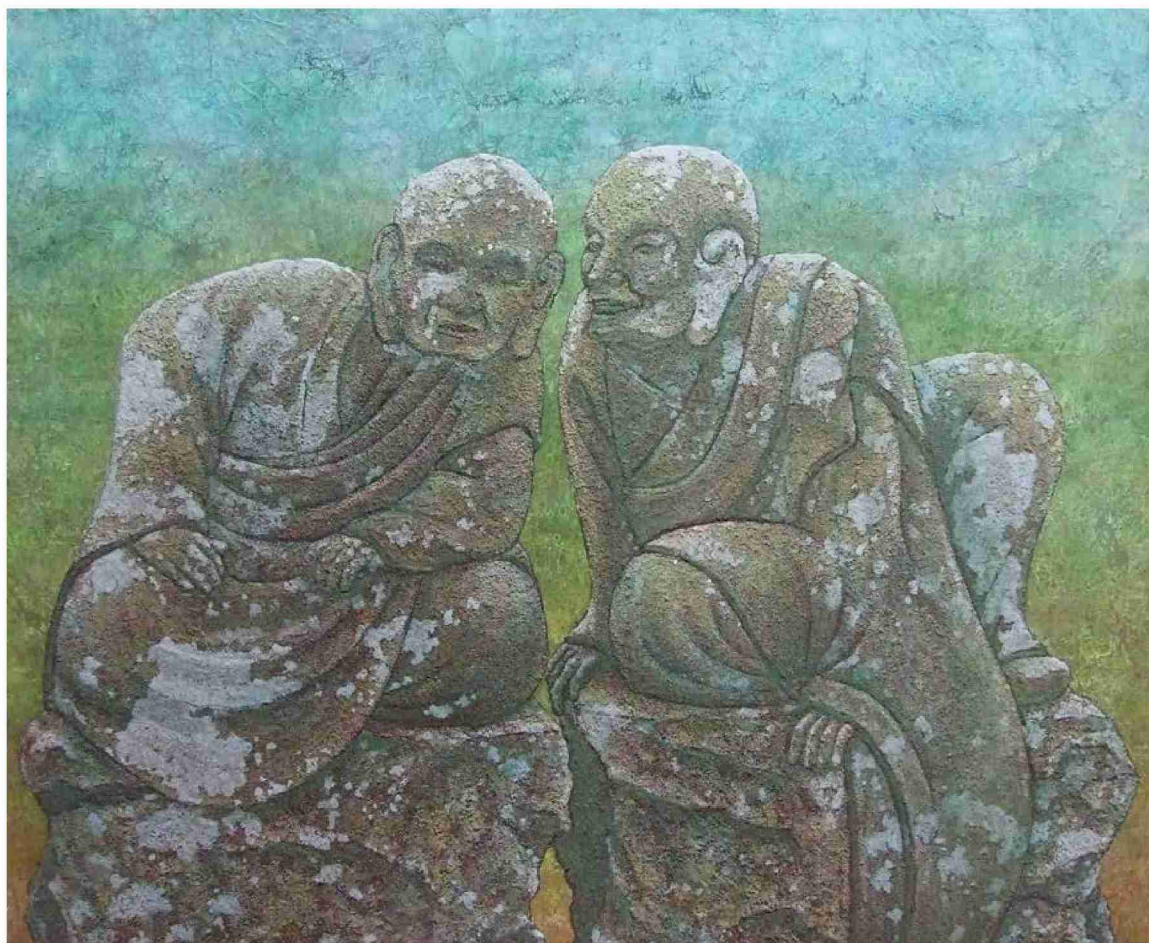
「ああ、どうしよう、時間が無い。先生のコメントを全部は反映できない。屋外が暗過ぎるし、室内が明る過ぎる。それに、仁王の顎がやや大きいし、首回りが少し変だ。どうしてこうなった？直せるか？それにしても時間が無い。ああ……」というのが、県展の搬入日2日目の朝だった。そんな時、高い所から「どうせへたくそなんだから、さっさと持っていきなさいよ」という、少々投げやりな連れ合いの声が聞こえてきた。で、急ぎ生乾きのキャンパスに

サインを入れ、仮縁に収めて近代美術館に着いたのがお昼前だった。だから、まさか入選するとはこれっぽっちも思っていなかった。

それにしても游美の編集者は、本紙に寄稿して頂く方の人選に相当苦労されているらしい。単純に絵画が好きというだけのビギナーから抜けられない私なんぞに、どうして表紙の原稿を依頼したのだろうか。「出来る事は断らない」が信条とは言え、本当に恥ずかしい事この上ない。（水戸市在住）

游美

- 1 富田 四郎さんの作品と作品についての言葉
- 2-3 海外美術鑑賞旅行
- 4 館長講演会
副館長あいさつ
- 5 木村武山生誕150年記念
日帰りバスツアー
- 6 会員のためのギャラリートーク
お知らせ・あとがき



富田 四郎 《ひそひそ羅漢さま》

2024年／岩絵具・水干絵具・砂・和紙／F15号／2025年茨城新興展

何で知ったか思い出せないが、川越の喜多院というお寺に五百羅漢の石仏が有る事がわかった。

私は日本画を始めて40年近くになるが、近年絵具の材料に砂を加え始めた。溪流の岩や、梅や桜の古木の質感を表すのに丁度よかった。

「石仏？砂を使えばそれこそ石仏そのものではないか」。早速予定をたて少々遠いが取材に行くことにした。石仏が500何体か有るそうなので、心踊らせながら向かった。移動に時間がかかるためスケッチはできなかったが、おもしろそうなのを何体かカ

メラに収めた。その中でなんと人間的で世俗的な羅漢さまを見つけた。「これはおもしろい」絵になると思い、制作を決めた。まず背景には、日本画独特の和紙を揉んでしわ模様をつけるもみ紙技法を用いた。制作の中で苦労したのは、自慢気に話す側と耳を傾けうなづくようなしぐさの羅漢さまのところ。その表情に、より親近感が生まれたように思う。またコケやサビを付けることにより、古色感の有るしつとりとした画面にまとまった。

(石岡市在住)